

角化性炎症ト共ニ其組織内ニ骨及軟骨組織ヲ有セル

口蓋扁桃腺ノ二例附其發生病理ニ就テ

岡山醫科大學耳鼻咽喉科教室

登坂清起
坪郷敏亮

口蓋扁桃腺内ニ軟骨又ハ骨組織ヲ有スルコトアルハ、千八百九十三年オルト及ダイヘルト氏ニ依リテ其三例ヲ報告セラレ、且其形成ニ關シテ論及セラレシ以來學者ノ注意ヲ喚起シ、我國ニ於テモ明治三十九年齋藤庄三郎氏ノ一例ヲ始メトシ、緒方、中村、松本、八木澤、東海林、鰐淵等諸氏ノ報告ヲ見ルニ至レリ。而シテ此等ハ何レモ屍體ニ於ケル、或ハ治療的ニ摘出セラレタル口蓋扁桃腺ヲ組織的ニ検査シ、偶然其内ニ軟骨及骨組織ヲ發見セシモノニシテ、是ヨリシテ各人又此異組織ノ發生病理ニ就テ種々興味アル觀察ヲ爲シ、其原因ニ就テ推論スル所アルモ、未ダ確乎タル一定說ニ歸着セザルモノノ如シ。即チ或ハ之ヲ以テ胎生時ノ遺物ニ過ギズト爲シ、或ハ扁桃腺ニ炎症アリ此處ニ結締織ノ増殖起リ其内ニ軟骨及骨組織ガ化生セルモノナリト論ズルアリ、或ハ兩者ヲ折衷シテ解決ヲ下サント試ミルモノアルガ如シ。今試ニ諸家ノ說ヲ大別シテ記サンニ

一、胎生第二鰓弓ノ遺物ナリト稱スル說

理由 (一)扁桃腺組織ニ炎症ノ跡ナキコト

(二)其軟骨組織ハ基質ニ乏シク軟骨囊比較的厚ク胎生時ノモノニ一致セルコト

(三)其位置常ニ扁桃腺ノ後下隅ニ存スルコト

登坂、坪郷—角化性炎症ト共ニ其組織内ニ骨及軟骨組織ヲ有セル口蓋扁桃腺ノ二例 附其發生病理ニ就テ

五二四

右ノ事實ヲ根據トシ胎生時ノ遺殘物ナリト結論セルモノニシテ、此說ノ賛成者ニハウオルスハム、ヴァイングレーブ、ライトマン、ルツケルト、ハルキン、アンゼルミー、緒方等ノ諸氏アリ。

二、炎症ニ原因セル化生說

該說ヲ始メテ唱論セシハポーラック氏(千九百〇一年)ニシテ、其理由トスル處ハ、氏ノ精研セシ四例ニ於テ常ニ出血竈ヲ有シ、何レモ多少共炎症ヲ伴ヘルニ因リ炎症ノ結果漸次癩痕ヲ形成シ其結締織中ニ軟骨及骨ヲ化生スルモノナリト言ヘリ。此說ニ賛成セルモノハルーバルシユ、シユワイツェル、東海林ノ諸氏ナリ。

三、以上二派ノ折衷說トモ見做スベキモノハ、一部ハ胎生時軟骨ヨリ來リ、一部ハ炎症性結締織ヨリ化生セルモノトナスモノニシテ、此說ヲ立テタルハネスケ氏ニシテルルーバルシユ(氏ハ始メ化生說ヲ唱ヘシモ後本說ヲ採ルニ至レリ)、中村、松本氏等モ之ニ賛同セルガ如シ。

四、此外カーター氏ノ如キハ其原因トシテ、唾液中ノ鹽類ガ扁桃腺内ニ蓄積スルニ因ルト云ヘリ。其他歐氏管軟骨ヨリ來ルモノナリト説ク人モアリ。然ルニ余等ハ最近其二例ニ遭遇セルニ、是等ハ此發生病理ニ就テ多少ノ寄與スル所アリト信ズルガ故ニ、次ニ此等症例ノ概略ヲ記述シ、次デ其所見ニ就テ多少ノ批判ヲ試ミントス。

第一例

病歴 二十一歳ノ學生、十一月十二日初診。

主訴 咽頭後壁部ノ搔痒感、咳嗽發作、喀痰ノ排出增量。

既往症

遺傳的關係トシテ認ムベキモノナク、兩親並同胞二人共ニ健在ス、血族ニ於テ患者ト同様ノ疾患ヲ有スルモノナシト、患者ハ花柳病ヲ否定シ、生來健康ニシテ著患ヲ知ラズトイフ、數年前ヨリ時々咽喉部ニ於ケル嚥下痛ヲ起セシコトアリシガ、今ヨリ凡ソ三週日前突然嚥下感ノ感胃

ニ罹リ、爾來咳嗽發作、喀痰排出ノ增量ヲ起シ、咽頭後壁部ノ搔痒感ヲ合併スルニ至レリ、依テ某醫師ノ診チ乞フニ咽頭角化症ナル診斷ヲ下セシト云フ、而シテ患者ハ此珍奇ナル病名ニ喫驚シ十一月十二日我外來ヲ訪ヘリ。

現症 診スルニ體格榮養共ニ中等度ニシテ顔色通常。

內科的診察ニヨリ左ノ結果ヲ得タリ。

(一)胃下垂症、(二)右肺炎浸潤、(三)慢性氣管枝加答兒、(四)便、尿ニ變化ナク喀痰中ニ核菌陰性ナリ。

局所の所見

鼻腔兩耳ニ著變ナシ、後鼻検査ニ於テモ異常ヲ認メズ、兩側口蓋扁桃腺ハ中等度ニ肥大シ、其表面ニ粟粒大ニシテ白色棘狀ニ隆起セル物質ヲ見ル、錐子ヲ以テ之ヲ除カントスルモ硬クシテ基底ニ密着シ離レズ、咽頭後壁ニ於テモ少數ノ同様白色隆起物ヲ見ル、更ニ喉頭鏡ヲ用ヒテ探見スルニ、舌根部殊ニ其兩側ニ於テ病變最モ著明ニシテ、斑點ノ數ヲ増シテ密集シ個々ノ大サモ増大シ太キハ砂粒大ニ達セルヲ見ル、一般ニ斑點ハ棘狀ニ隆起シ全面粗糙ニシテ恰モ水成岩ノ永ク激浪ニ打タレ棘立セルガ如シ。

以上ノ所見ニ依リ殆ド類症鑑別ヲ要セズシテ咽頭角化症ナル病名ヲ下シ

顯微鏡の所見 剔出セル扁桃腺ニ「チエロイヂン」包埋ヲ施シ連續切片ヲ作り、「ヘマトキシリン、エオジン」重染色法、及「ヴァンギーソン」氏重染色法ヲ施シ檢鏡シタリ。蓋、斯クシテ余等ノ角化性扁桃腺炎ニ對スル知見ヲ加ヘント欲セリ。然ルニ此等ノ標本ヲ鏡檢セル中ニ偶然ニモ、其基底部ニ近キ扁桃腺組織内ニ骨及軟骨組織ノ散在セルコトヲ發見セリ。夫等ノ骨及軟骨ハ肥厚セル扁桃腺皮膜中ニ散在性ニ位置シ、殊ニ扁桃腺底部ニ近キ皮膜ノ内側ニ於テ然リ、而シテ一切片中ニ多キハ二〇—三〇箇位モ軟骨部位ノ存在スルヲ認メ、軟骨ノ一部ハ又漸次骨組織ニ移行シ次デ骨髓ノ形成ヲ起セルガ如キモノヲ認ム、尙ホ又結締組織ガ軟骨組織ニ入り込ミ該組織ニ移行セル部ヲモ明ニ認メ得。即チ骨組織ハ石灰ヲ有スル軟骨細胞群ニ接觸シ、或ハ之ニテ包圍セラレ處々明カニ化骨點ヲ見ル。軟骨及骨組織以外ニ之ヲ包容スル結締組織ハ充血セル血管ヲ有ス、尙ホ標本ヲルゴール氏液染色法及ギームザ氏液染色法ニ依リ染色シ糸狀菌ノ探索ヲ行ヒシモ遂ニ發見シ得ザリキ。

即チ本例ニ於テハ角化性炎症ヲ有スル口蓋扁桃腺ヲ治療ノ目的ニ剔出シ、是ニ對シテ組織的檢査ヲ爲シ其組織中ニ偶然ニモ軟骨及骨組織ヲ發見セシモノナリ。サレド余等ハ此等ノ組織的檢査ノ結果此等兩者ノ合併ハ必ズシモ偶

得ルモノナリ。

處置及經過

元來本症ノ療法ニ向ツテハ、觀血の療法ヲ薦ムルアリ、單ニ藥物塗布ノミヲ施スアリ、或ハ電氣燒灼法、光線療法等ヲ推奨スルモノアリ。余等ハ本例ニ對シテ手術的療法ヲ採用セリ。即チ暫ク内科的療法ヲ試ミ胸部症狀ノ減弱セル十一月二十四日入院ヲ命ジ、兩側口蓋扁桃腺ノ全剔出ヲ行ヘリ、術後四日ニシテ退院、十二月二日更ニ舌根部並咽頭後壁部ノ粘膜炎ヲ搔抓除去シ、爾後ハ藥物塗布療法ノミヲ繼續シ、凡ソ二週日後ニ至リテ創面全ク癒ヘ咽頭搔痒感去ル。

登坂、坪郷—角化性炎症ト共ニ其組織内ニ骨及軟骨組織ヲ有セル口蓋扁桃腺ノ二例 附其發生病理ニ就テ

五二六

然ノ結果ト見做ス可キモノニ非ズシテ、却ツテ其兩者ノ發生ニ就キ何等カノ關係ノ存スルモノニ非ザルヤノ疑問ヲ懷ケリ。蓋、上皮ノ角化ト云ヒ、結締織ノ化骨ト云ヒ其發生機轉ニハ何等カノ共通點アルヲ思ハシムレバナリ。然ルニ余等ハ更ニ興味アル第二症例ニ遭遇セリ。

第二例

病歴 二十二歳ノ男學生(醫專生)、十二月十六日初診。

主訴 咽頭後壁部ノ乾燥並異常感。

既往症

遺傳的關係トシテ認ムベキモノナク、花柳病ヲ否定シ、生

來健ニシテ幼時麻疹ヲ經過セル外著患ヲ知ラズ、患者ハ輕度ノ咽頭後壁部ノ乾燥並異常感ヲシテ以テ、或日開口シテ鏡面ニ向ヒシニ兩扁桃腺ニ白色斑點様物ヲ發見シ驚キ我教室ヲ訪ヘリ。

現症

診スルニ體格榮養共ニ中等度ニシテ、内科的ニ著變ナシ、依テ

尋メルニ、其後再發セズ目下些ノ異常ナシト。

顯微鏡的所見

本例ニ於テハ前例ニ鑑ミ單ニ治療ノ目的ノミニアラズシテ、該扁桃腺組織中ニ或ハ骨又ハ軟骨組

織ヲ有スルコトアラン、トノ想像ノモトニ剔出マシ扁桃腺ヲ、豫メ硝酸「フオルマリン」液ニテ二日間脱灰シ、然ル後型ノ如ク「ツエロイヂン」包埋ヲ施シ連續切片ヲ作り前例ト同染色法ヲ行ヒ鏡檢セシニ、果シテ其想像ニ違ハズシテ標本中ニ多數ノ軟骨及骨組織ノ散在スルヲ發見セリ。而シテ骨及軟骨ハ肥厚セル扁桃腺皮膜中ニ散在性ニ位置シ、單ニ扁桃腺底部ニノミナラズシテ他部ニ於テモ可成多數散在シ一切片中多キハ矢張二〇—三〇箇位モ軟骨部位ノ存在スルヲ認メ、且又軟骨ノ一部ハ骨化シ次デ骨髓ノ形成ヲ起セルモノアリ。尙ホ又結締織纖維ノ一部ハ僅ニ膨脹セルガ如キ狀ヲ呈シ此ノ如キ狀態ハ次第ニ進行シ其一部消失シテ透明體トナリ軟骨ニ化生セルヲ明ニ認メ得。尙ホ骨組織ハ石灰ヲ有スル軟骨細胞群ニ接觸シ或ハ之ニテ包圍セラレ處々ニ明ニ化骨點ヲ見ル、是等ノ異組織以外ニ之ヲ包容スル結締組織ハ充血セル血管ヲ有ス。(附圖參照)

局部ノ診査ヲ行フニ、兩口蓋扁桃腺、舌根扁桃腺並咽頭後壁ニ白色棘狀隆起物ノ附着セルヲ見ル、而シテ兩側ノ口蓋扁桃腺ハ中等度ニ肥大セリ、本例モ亦鑑別ヲ要セズシテ容易ニ咽頭角化症ナル診斷ヲ下シ得タリ。

處置及經過

本例モ第一例ト同ジク觀血の療法ヲ採用セリ、即チ兩

側扁桃腺ヲ全剔出シ他部ノ角化セル粘膜炎ヲ悉ク搔抓セリ、爾後藥物塗布療法ヲ施スコト四日ニシテ、爾來患者ハ自家療法(主トシテ含嗽)ヲ行フコトヲ約シ教室ヲ去レリ、而シテ手術後七箇月ノ現在ニ於テ書信ヲ發シ現狀ヲ尋メルニ、其後再發セズ目下些ノ異常ナシト。

以上記述セルガ如ク余等ノ二例ニ於テモ、其組織内ニ發現セル軟骨及骨組織ハ此等組織自身ノ顯微鏡的所見ヨリシテモ結締織ヨリ漸次化生セルモノナリト思惟セラルルニ、此處ニ此發生病理ノ考慮ニ際シ、見逃ガス可カラザルハ、此等二例共ニ角化症ヲ有スルコトナリ。即チ既ニ第一例ニ於テ此兩者ノ合併ヲ必ズシモ偶然ナリト見做スヲ得ザルモノト思考セシ余等ハ、此考慮ノモトニ検査セシ第二例ニ於テ、更ニ此兩者ノ合併ヲ證明セルヨリシテモ、其關係ニ就テ余等ノ注意ヲ喚起スルコト深シ。蓋、咽頭角化症ノ原因ニ就テモ、尙ホ疑問ノ存スル今日、若シ此兩者ノ合併ガ偶然ナラズトセバ、是ヨリシテ亦其原因ニ關シテ一層的確ナル批判ヲ下シ得ルニ至ラント思惟サルレバナリ。

抑咽頭角化症ニ就テハ千八百七十三年ベー、フレンケル氏ガ一學生ノ舌根及口蓋扁桃腺ニ帶黃白色ノ斑點ヲ認メ、之ヲ鏡檢シテ上皮塊ト多數ノ球菌及種々ノ桿菌トヲ發見シ是ヲ良性咽頭「ミコーゼ」ナル名ノ下ニ報告セルヲ以テ載籍ノ嚆矢トス。我國ニ於テハ余等ノ調査セル範圍ニテ明治三十二年岡田博士ノ症例ヲ筆頭ニ岩崎、井上、吉田、上田等ノ諸氏アリ。但シ報告上ヨリ見レバ頗ル稀ナル如キモ、事實ハ左程稀ナルモノニ非ザルハ余等ハ本症ニ時々遭遇セル事ヨリシテモ明カニシテ而モ之ニ就テ一々誌上ニ報告スルモノニ非ズ。是ハ又他ノ臨牀醫家ニモ同様ノ事アラント考フレバナリ。而シテ此ガ原因ニ關シテハベー、フレンケル氏ハ千八百七十三年ノ發表以來研鑽スルコト數年ニシテ千八百八十年菌ハ主トシテ絲狀菌屬ナル「レプトトリックス、ブッカーリス」ヨリナルト唱導セリ。千八百八十三年グムビーネル氏ハ絲狀菌ヲ以テ本病ノ病源トナシ同年ヘーリング氏ハ組織的檢索ノ結果絲狀菌性咽頭「ミコーゼ」ナル新名ヲ附セリ。該菌ハルゴール氏液ニテ青色反應ヲ呈スルコトヲ述べ、且始メテ角化上皮ノ成立ヲ唱ヘタリ。其後サイフェルト、デツケル、ヤコブソン、ユーラツツ、ミルレル、ローゼンベルヒ、アッケルマン等ノ報告ハ皆絲狀菌說ニ贊セリ。然ルニ千八百九十五年ジューペンマン氏ハ精細ナル組織的研究ノ結果發表シヘーリング一派ノ菌因說ヲ打破セリ。氏ノ所見ハヘーリング一派ノモノト殆ド一致セシモ表皮ノ異常肥厚及角化ヲ重大視シ、絲狀

登坂、坪郷—角化性炎症ト共ニ其組織内ニ骨及軟骨組織ヲ有セル口蓋扁桃腺ノ二例 附其發生病理ニ就テ

登坂、坪郷—角化性炎症ト共ニ其組織内ニ骨及軟骨組織ヲ有セル口蓋扁桃腺ノ二例 附其發生病理ニ就テ

菌ノ存在ヲ附隨の物トナシ、從來病源視サレシ該菌ハ健康人ノ口中ニ常ニ存シ、殊ニ表皮ガ死滅セル時ニ好ンデ之ニ寄生スルモ特殊ノ疾病ヲ惹起スルモノニアラズ、本病ノ特徴ハ腺窩上皮ノ強度ナル角化機轉ニアルト斷定シ、之ヲ腺窩性增殖角化症ト唱ヘタリ。

千九百〇四年オノデイ、エンツ氏等モ咽頭角化症ノ名ノモトニ、自己ノ實驗例ニ就テ精密ナル組織的檢査ノ結果、絲狀菌ハ何等原因の意義ナク其標本中ニ炎症ヲ認メシヲ以テ、慢性炎症ガ角化ノ原因ナラント結論セリ。爾來諸家ノ報告多數ナルモ、發生病理ニ關シテハ皆其說ヲ異ニシ、本症ガ主トシテ若年者ヲ犯スヨリ、先天性基礎ヲ有ストナシ、或ハ同一家族ヲ犯スコトアルヲ以テ血族の關係アリト論ズルアルモ(ウンドルフ)、諸家ノ意嚮ハ概シテジ—ベンマン氏ニ傾ケリ。而シテ本邦ニ於ケル報告者ノ多クモ亦主トシテシーベンマン、オノデイ、エンツ氏等ノ說ニ加擔セリ。

然ルニ余等ノ茲ニ報告セル二症例ハ何レモ角化症ト共ニ扁桃腺組織中ニ骨及軟骨組織ヲ有スルモノニシテ而モ此兩者ノ發現ヲ偶然ノ事實ト見逃シ得ザルコトハ上述セルガ如ク、更ニ是ヲ從來ノ文獻ニ徵スルニ、我國ニ於テ口蓋扁桃腺内ニ骨及軟骨組織ヲ有スルモノトシテ報告セラレシ七例中、其三例(齋藤、松本、鰐淵)ハ又同時ニ角化症ヲ有スルモノナリ。換言スレバ角化症ヲ有スルガ故ニ治療的ニ剔出セラレタルモノニ於テ其組織内ニ此等ノ異組織ヲ發見セラレタルモノナリ。是ヲ以テシテモ、余等ハ此兩者ノ發現ヲ決シテ偶然ノ事實ニ非ズト信ズルモノニシテ、却テ此兩者ハ或共通の原因ノ作用ニ依ツテ其發生ヲ促ガサレシモノナリト見做スノ當ヲ得タルモノナラント信ズ。而モ上述セルガ如ク、上皮ノ角化ト云ヒ、結締織ノ骨形成ト云ヒ、其病的機轉ニ於テモ亦共通ノ點アルニ於テオヤ。然ラバ此際共通の原因トシテ思考シウルモノハ如何。既述セルガ如ク之ヲ胎生時遺殘軟骨ヲ以テ説明スルヲ得ズ、且又之ガ原因トシテ菌ノ作用ヲ肯定スルコト能ハズ。斯ク考ヘ來レバ、余等ハ從來此兩者ノ箇々ノ發生原因中比較的有力ナル炎症說ヲ採ルノ至當ナルヲ思フモノニシテ是又余等ノ組織的所見ノ左袒スル所ナリ。以上論ズル所ヨリ

シテ余等ハ咽頭角化症又ハ扁桃腺内ノ骨及軟骨組織等ノ發生ハ或ハ他ニ尙ホ個人的ニ特別ナル要約アラシキモ、少ク
トモ之ニ炎症性機轉ノ加ハリテ其化生ヲ見ルニ至ルモノナルヲ信ズ。

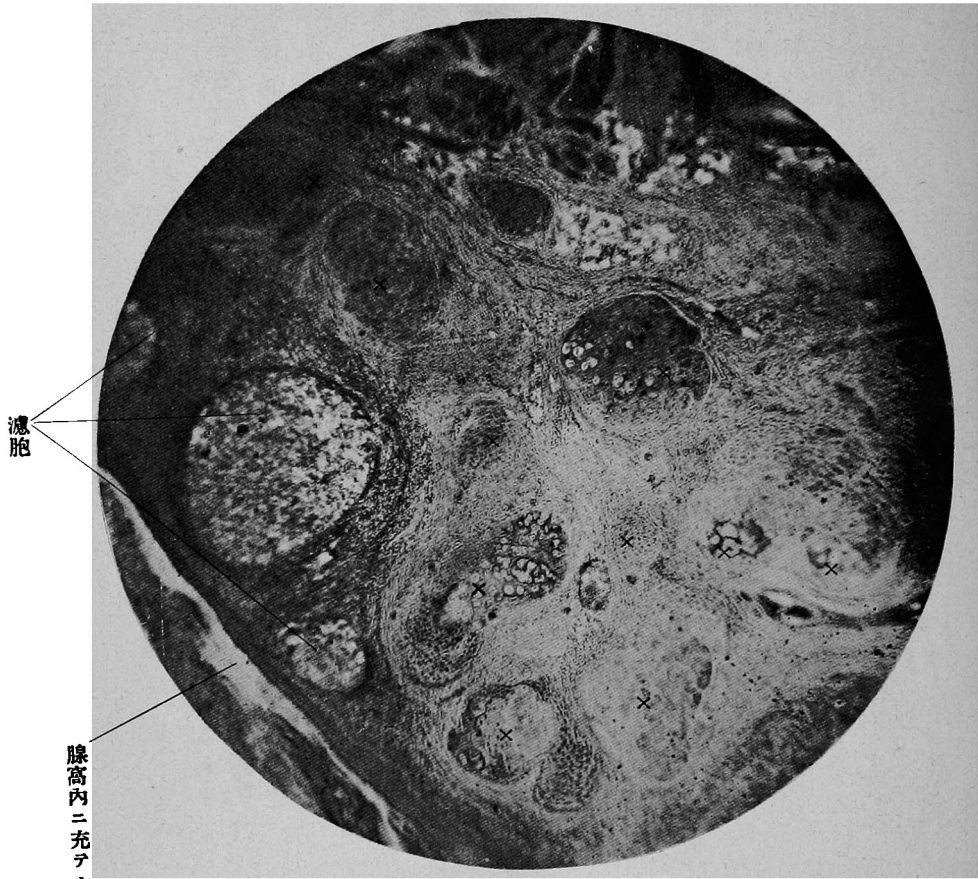
終リニ茲ニ本問題ニ就テ指導ヲ校園ヲ毎フヘシ田中教授ニ深厚ナル敬意ト感謝ヲ表ス。

主ナル文献

- 1) Deichert; Ueber Knorpel u. Knochenbildung an den Tonsillen, Vir. Arch. Bd. 141.
- 2) Lubarsch; Knorpelbildung in Lymph-knoten u. Gaumentonsillen, Vir. Arch. Bd. 177.
- 3) Ruckert; Ueber Knochen u. Knorpelbefunde in den Tonsillen, Vir. Arch. Bd. 177.
- 4) H. Halkin; Beiträge zum Studium der Mandelverknöcherung, ZR. f. L.-Rh. 1906.
- 5) W. W. Carter; Knochengeschwulst in beiden Mandeln, Z. f. L.-Rh. 1906.
- 6) B. Schweitzer; Ueber Knorpel u. Knochenbildung in den Gaumenmandeln, Z. f. L.-Rh. 1908.
- 7) Walsham; Ueber das Vorkommen knorpeliger u. knöcherner Knötchen in den Mandeln, Z. f. L.-Rh. 1889.
- 8) H. Naeske; Ueber Knorpel u. Knochenbildung in den Tonsillen, Deutsch. Ztschr. f. Chirurgie. Bd. 63.
- 9) K. Reitmann; Ueber das Vorkommen von Knorpel u. Knochen in den Gaumentonsillen, Monatschr. f. Ohrenh. 1903.
- 10) H. Topfer; Ueber Muskeln u. Knorpel in den Tonsillen, Arch. f. L.-Rh. 1901, Bd. 11.
- 11) Dreyfuss; Ueber Knochenbildungen in der Schleimhaut des Kehlkopfs und der Luftröhre, Arch. f. L.-Rh. Bd. 23, 1910.
- 12) B. Fraenkel; Berl. Klinische Wochenschrift, 1873.
- 13) Baginsky; Berl. Klinische Wochenschrift, 1876.
- 14) Heryng; Zeitschrift f. Klinische Medizin, 1884.
- 15) Ackermann; Deutsche med. Wochenschrift, 1894.
- 16) Spanns; Deutsche med. Wochenschrift, 1893.

登坂、坪郷—角化性炎症ト共ニ其組織内ニ骨及軟骨組織ヲ有セル口蓋扁桃腺ノ二例附其發生病理ニ就テ

- 17) Siebenmann; Arch. f. Laryngologie, Bd. 2, 1895.
- 18) Onodi u. Entg; Arch. f. Laryngologie, Bd. 16, 1904.
- 19) Hanin u. Tarhorsti; Arch. f. Laryngologie, Bd. 19, 1907.
- 20) T. M. Wolf; Über seltene Lokalisation der Mycosis leptothricia, Arch. f. Laryngologie, Bd. 19, 1907.
- 21) Siebenmann; Ueber Mitbeteiligung der Schleimhaut bei allgemeiner Hyperkeratose der Haut, Arch. f. Laryngologie, Bd. 20, 1908.
- 22) 齋藤庄三郎; 口蓋扁桃腺ニ生ヅタル「ク」ヲ「ト」ヅス「」及其腺内軟骨ニ就テ. 北越醫學會會報第一五三號.
- 23) 緒方繁雄; 扁桃腺内ニ發生シタル軟骨組織ニ就テ. 福岡醫科大學雜誌第三卷第三號.
- 24) 松本五郎; 口蓋扁桃腺組織内ノ軟骨及骨生成ニ就テ. 大日本耳鼻咽喉科會會報第二三卷第四號.
- 25) 岩崎徳松; 咽頭粘膜炎角化症ニ就テ. 大日本耳鼻咽喉科會會報第十八卷.
- 26) 井上庸三; 咽頭角化症ニ就テ. 大日本耳鼻咽喉科會會報第十八卷.
- 27) 吉田政次郎; 角化性扁桃腺炎. 京都府立醫學專門學校校友會雜誌第六四號.
- 28) 東海林重信; 口蓋扁桃腺内ノ異組織ニ就キ. 醫海時報第一三三〇號.
- 29) 鰐淵源; 軟骨及骨組織ヲ有スル咽頭角化症患者ノ扁桃腺. 大日本耳鼻咽喉科會會報第二八卷第一號.
- 30) 中村豊; 扁桃腺肥大ノ病理. 大日本耳鼻咽喉科會會報第二三卷第四號.



濾胞

腺窩内ニ充テル角化上皮

x...骨又ハ軟骨組織

附圖說明。